

Economic Indicators

定例経済指標レポート

指標名: 国際収支(2013年5月)

発表日2013年7月8日(月)

～経常黒字は単月では縮小も、基調は拡大へ～

第一生命経済研究所 経済調査部
担当 エコノミスト 大塚 崇広
TEL : 03-5221-4525

		原数値 経常収支 (億円)	季調値 経常収支 (億円)	貿易・サービス収支			所得収支
				貿易収支	サービス収支		
					貿易収支	サービス収支	
2012	1月	▲ 4,556	3,277	▲ 6,695	▲ 5,532	▲ 1,163	11,157
	2月	12,026	8,331	▲ 2,646	▲ 865	▲ 1,781	11,548
	3月	13,074	4,746	▲ 5,278	▲ 4,295	▲ 983	10,923
	4月	3,735	3,917	▲ 7,567	▲ 5,024	▲ 2,543	12,394
	5月	3,421	4,350	▲ 6,384	▲ 4,023	▲ 2,361	11,953
	6月	4,221	7,106	▲ 4,108	▲ 1,928	▲ 2,180	12,048
	7月	6,625	3,602	▲ 7,558	▲ 4,936	▲ 2,622	12,106
	8月	4,448	6,559	▲ 4,984	▲ 2,590	▲ 2,394	12,400
	9月	5,137	▲ 402	▲ 11,951	▲ 8,980	▲ 2,971	12,368
	10月	4,208	5,010	▲ 6,403	▲ 4,498	▲ 1,905	12,144
	11月	▲ 1,796	3,633	▲ 7,179	▲ 5,092	▲ 2,087	11,744
	12月	▲ 2,307	2,152	▲ 8,537	▲ 6,331	▲ 2,206	11,983
2013	1月	▲ 3,484	4,356	▲ 7,805	▲ 6,062	▲ 1,743	11,923
	2月	6,497	▲ 207	▲ 13,100	▲ 11,465	▲ 1,635	13,573
	3月	12,831	3,672	▲ 9,100	▲ 7,704	▲ 1,396	13,555
	4月	7,500	8,527	▲ 9,387	▲ 7,635	▲ 1,752	18,910
	5月	5,407	6,233	▲ 5,008	▲ 4,255	▲ 752	12,416

(出所)財務省「国際収支統計」

○ 経常黒字(季調値)の基調は拡大へ

5月の経常収支は原数値で5,407億円の黒字と、ほぼコンセンサス(5,950億円、レンジ:3,244億円～11,594億円)通りの結果となった。季節調整値でみると、6,233億円の黒字(4月は8,527億円の黒字)と前月から黒字幅が縮小した。黒字縮小の主因は前月に大きな伸びを見せた直接投資収益の反動減であるが、貿易赤字が比較的大きく縮小したこともあり、経常収支全体の黒字縮小幅は小幅なものにとどまった。

貿易収支(季節調整値)は、輸出金額(前月比+6.1%)が前月から増加した一方、輸入金額(前月比▲0.1%)が前月から小幅減少した結果、赤字額は4,255億円(4月は7,635億円の赤字)と前月から縮小した。均してみても、このところは赤字拡大に歯止めがかかる状況となっている。これまでは円安による輸入価格押し上げの影響が強く、貿易赤字は拡大する傾向にあったが、このところは数量面での動向が貿易赤字縮小圧力となっている。価格の変動を除いた実質輸出(日本銀行公表)は①米国を中心とした海外経済の緩やかな回復や②円安の数量効果の顕在化、③日中関係悪化の影響の緩和、などを背景に持ち直している。また、実質輸入も増加が一服しており、円安により輸入品が割高となったことで輸入量が抑制されている可能性がある。

○ 貿易外収支の動向: 所得収支の黒字も増加基調

貿易外収支の内訳を季節調整値で確認すると、サービス収支は752億円の赤字と前月(▲1,752億円)から赤字幅が縮小し、均してみても赤字幅が縮小する傾向にある。内訳をみると、昨年末まで海外経済の減速等を背景に赤字傾向で推移していたその他サービス収支が黒字傾向で推移していることや、円安等を背景とした訪日

外客数の増加により旅行収支の赤字が縮小傾向にあることが目立つ。

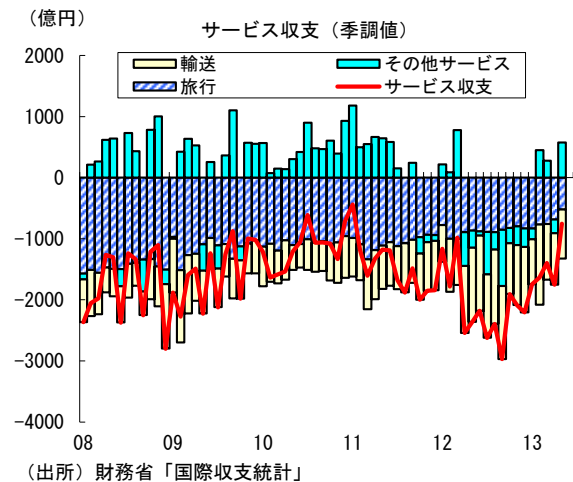
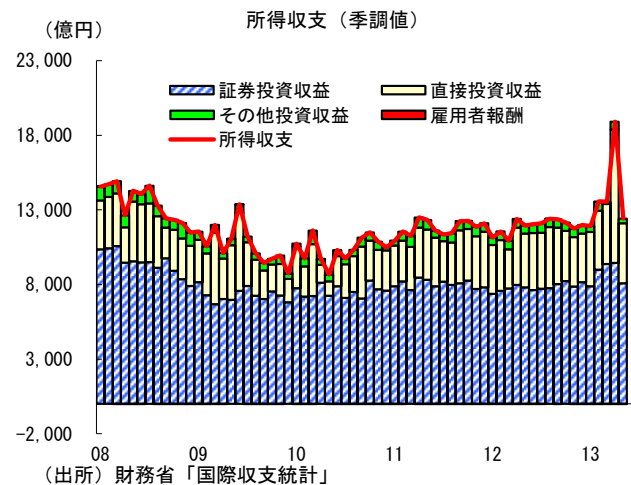
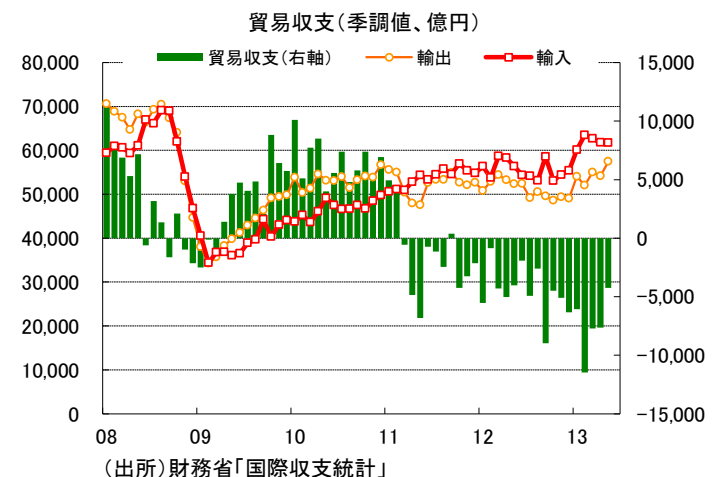
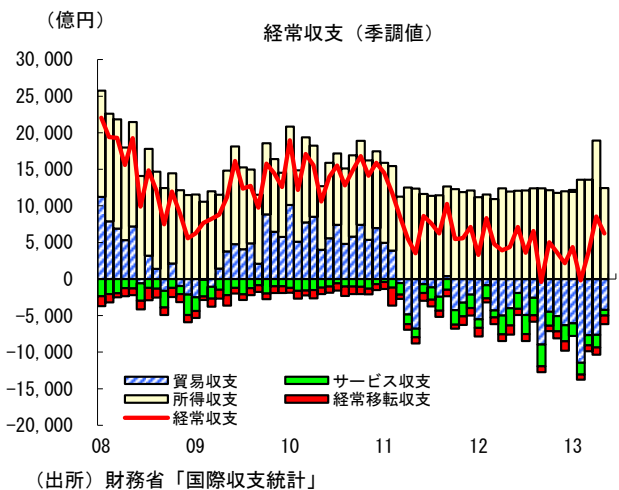
所得収支をみると、5月は12,416億円の黒字と前月(18,910億円)から黒字幅が大幅縮小した。前述の通り、主因は直接投資収益の反動減である。財務省によれば前月は受取で大口のものが複数みられたとのことで、直接投資収益は前月比で大幅拡大していた。今月はその反動がでた形だが、水準としては4,030億円と依然高い。他方、証券投資収益は引き続き高水準は維持しているものの、黒字拡大は一服している。証券投資収益は比較的為替相場との連動性が高く、円安進展の一服が影響したものとみられる。

○ 経常収支の黒字は拡大局面へ

このように、直接投資収益の反動減を主因に経常収支は前月から黒字額が縮小した。ただし、これまで経常黒字縮小の主因となっていた貿易収支は数量面から赤字縮小の兆しが見られており、経常収支は黒字拡大局面に入りつつある。

先行きを展望すると、貿易収支は①円安の数量効果（輸出量の押し上げと輸入量の抑制）の本格化、②米国を中心とした海外経済の回復による輸出増を背景に徐々に赤字幅を縮小させよう。所得収支も、豊富な対外純資産を背景に高水準の黒字を維持する公算が大きい。燃料輸入の高止まりにより貿易収支の黒字復帰はしばらく見込めないが、総じて経常収支の黒字は緩やかな拡大基調になるとみている。

一方、リスク要因は海外経済の動向であり、特に中国経済の先行きは不透明感が強い。仮に中国経済が大幅減速となれば、輸出の下振れを通じて経常黒字の拡大は抑制されることとなろう。



本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。